

# 社会学論

倉橋重史

## 1.

どのような研究に関しても言えると考えられるが、とくにこのテーマに関する作業を開始する場合、まず初めにこのテーマの意図を明らかにし、何故、この表題を選んだのかを述べなければならないであろう。

ここでいう社会学論とは、社会学にかんする理論 (Theorie der Soziologie) ではなく、社会学とは何か (Was ist Soziologie?) 社会学は一体どのような学問なのかを問う議論である。つまり、社会学は科学なのかどうか、科学といえるならそれはどのような特徴をもったものなのか、また科学でないとすれば、それはどうして科学でないといえるのか、あるいは科学でない社会学とは何なのか、その内容はどのようなものであるのか、といった点を問うことが必要であろう。

そこで、まず最初に、何故社会学論というような問いをするのかという点から言及しなければならないであろう。その理由として、いくつかの点を挙げることができる。

第一は、この種の問いは社会学の研究において不可避なものであるということである。あるいは社会学を研究する人間は、この問いを避けて通ることはできないとであろう。A. コント以来、社会学の研究は、社会学とは一体どのような学問なのかを問い続けてきた。哲学は哲学すること (philosophieren) であるといわれるように社会学の研究者も自らを問い続けることによって社会学 (soziologieren) をすることができる。したがって、社会学の研究は社会学自体に向けられ、そこから出発し、発展していくという性質を内在している。また、それはあえていえば社会学の研究のアルファであり、オメガであるといえるのである。社会学の研究者は誰でも自己の専門とする分野を中心としてその研究がどのようにして社会学であるの

かを問い直し、再検討しなければならない運命にあるといえよう、それは自己反省、自己の再検討であり、自らを俎上にのせておこなう作業である。

第二の理由として、社会学のこのような学問性、科学性にかんする問いは過去の社会学の研究を研究することによって行なうことができるという点である。さきにのべたように、社会学の研究が社会学の学問性・科学性を問う作業であるという性質を有するならば、過去の社会学の研究がこの作業をどのように行っていたかを知ることは、社会学論の研究にとってきわめて重要であるといえる。しかし社会学史の研究は、過去の社会学のたんなる反芻、反復ではなく、社会学の研究者の社会学の見方、社会学の構築のために必要であり、社会学論の展開のために不可欠なのである。それは現代的視点からする社会学説の再検討であり、再解釈であると共に、また、それは過去の学説の批判的摂取であり、自己の社会学史観の修正と再検討という作業でもある。その作業を通して現代的視点自体を問うという、きわめて矛盾した作業であるといえる。いわばクルマを運転しながらそのクルマを後ろから押すという作業をおこなわなければならない種類のものといえよう。

T. パーソンズは『社会的行為の構造』の第一章の初めに、C. プリントンの言葉を借りて「スペンサーは死んだ。しかし誰がどのようにして彼を殺したのか、それが問題である」とのべている。まさに、温故知新の言葉どおり、社会学史の研究課題は、過去の社会学を新しい観点から再批判し、再解釈することであるが、それは社会学とは何か、社会学とはどのような学問であり、科学であるかといった社会学論の研究の課題でもある。したがって社会学史の研究は社会学論の研究と重なり合っており、この点

で社会学史の問いは社会学論の問いと共通項を有しており、ある意味で連続しているということもできる。

第三の理由は、今日ほど社会学の学問性、科学性が問われている時代はないという点である。少し長いタイム・スパンをとれば、1960年代後半にみられる所謂「ラディカル・ソシオロジ」の運動、「批判する社会学」と「批判される社会学」、「告発する社会学」と「告発される社会学」の再検討以来、「社会学の社会学」を問いつづける流れは存在した。また、グールドナーの「自己反省の社会学」もあとでのべる知識社会学や科学社会学のアプローチをとりつつ理論と実践の問題を社会学がどのように解決するかという点に焦点を当てている。社会学は現実の問題の解決にどのように役立つのか、激変する社会をどのようにとらえることができるのかといった問題と、既存の社会学理論はどれだけ危機を解決できるかといった疑問と、その危機を克服するために、社会学とは何か、社会学の理論とは何か、いままでの理論は果して理論といえるのか、それは疑似的な理論ではなかったのかといった疑問をたんに投げかけるだけでなく、そこから新しい何らかの解答を見出そうとする作業を行なわなければならない。ここに社会学自体の対象や方法をはじめ、社会学の学問性、社会学知を問う社会学として社会学論を開始する必要があるといえる。

第四の理由は、科学自体が今日ほど問われている時代はないという背景がある。この背景のもとで社会学論を問わなければならないという点である。科学とは何かについて、科学論をは

じめ認識論、科学史、さらに科学社会学は問いつづけている。いままで物理学をモデルとした自然科学の科学性が問われ、科学と非科学との区分がどこにあるのかが問題となっている。また科学の概念の内容もあいまいなものであることが指摘されている。ハンソンの「視察の理論的負荷性」や、T. クーンのパラダイムの社会的相対性の主張は従来の科学観の見直しであり、科学にかんする既成観念への挑戦である。社会学も科学であることを標榜し、科学的であることを自認する限り、この種の科学観の再検討の作業の影響を受けざるを得ない。

第五の理由は、いわゆる「社会学の社会学」としての知識社会学、科学社会学からの問いかけである。知識社会学や科学社会学は、自然科学的知識のみならず、社会科学的・社会学的知識自体を俎上にのせて研究をおこなうことが必要である。社会学は一定の知識の体系であり、認識の体系であり、科学であるならば、それ自体、知識社会学や科学社会学の研究対象とならざるを得ない。しかしそれは、『社会学の社会学』の社会学』という問いの無限の連鎖となる危険性を孕んでいる。これを断ち切るためにどのような方法があるのかという点を再検討するために、社会学論の研究を行なう必要性があるといえよう。

さしあたって以上五つの理由が、なぜ社会学論を行なわねばならないかという理由であるが、それはまさに問いとは何かといった基本的な点にまで立ち入らなければ解けない種類のものといえる。そこで次に問いを問うという作業を行ないたい。

## 2.

社会学論の出発点は、第一に社会学論における問いとは何かを明らかにすることにある。それは問いを問うという作業によって明らかになる。この作業によって何らかの答えを得て、さらにこの答えを検討することによって問い続ける作業である。そこでまず最初に、問いを問うということが一体どのような意味をもつかを考えてみたい。

問うことができるのは、いうまでもなく人が無知 (nichts wissen) と既知 (wohl wissen) との中間の範囲の知 (wissen) を有するからである。全く何も知らないことについて疑問を抱き問うことはできないし、既に十分知り尽していることを改めて問うことは無意味である。つまり、問いは無知と既知との中間にあるから生じるのである。換言すれば、無知と既知との距

離、あるいは相違を認識することによって問いは生まれる。この相違に関する何らかの知見が問いの前提にあって未知 (noch nicht wissen) なるものへの問いかけができるのである。しかし、この未知なるものの存在はどうしてわかるのであろうか。未知なる存在の発見はどのようにして生じるのであろうか。

哲学的に言えば、それは懐疑 (Zweifel) である。疑うことは無知であり、未知の分野が存在することの認識に立ってはじめておこなうことができる。しかもより多く、より広く、かつ、よりよく知ろうとする欲求がないと問いは生じない。

したがって、社会学論の問いは社会学とは何かに関して何らかの知識が既にあって、その知識をこえて社会学の未知なるものを問う問い方であり、さらに、この既知なる知識自体の真偽を問う問い方であるといえよう。つまり社会学論の問いには二種類が存在する。一つは、問うための前提として社会学の既存の知識から生じる問いと、もう一つは、その前提的知識自体を問い直す問いである。最初の問いのタイプは、例えば芸術作品の鑑賞の場合とよく似ている。作品を見ずしては鑑賞できず、鑑賞を重ねるにしたがって鑑賞眼が鋭くなるのと同様、社会学論の問いにおいても既存の社会学的研究を看過しては問うことが不可能であり、社会学理論の研究を学習することによって問いを深化させることができる。それは問い方や問い自体が既存の社会学的研究の学習を通してなされるという意味で学説史的な問い方のタイプであり、あるいは時間的推移を述べるという点で、段階的・発展的な問い方である。ポパー流に言えば、漸次的で、「継ぎはぎ繕い (piecemeal)」的なタイプのものといえよう<sup>1)</sup>。

これに対し、第二番目の問いのタイプは、前提となる既存の知識自体に対する問いかけである。それは、社会学の既存の知識がどのように社会や人間を認識してきたかを問い直す作業である。またそれは、その有効性、真偽性にたいする疑問を投げかける作業でもある。今迄の社会学の理論や概念自体に対する疑問と批判、再検討をせまるのがこのタイプである。勿論、そ

れは既存の社会学の理論を無視し、それを度外視してなされるのではない。既存の社会学の認識の存在を認め、それを理解し、一定の評価を与えたうえで、それが現実の社会的状況を理解するのにどのように役立つのかを点検し、その社会的な理論や思考が社会的現実をどのように把握できるかを吟味しようとする。クーンというパラダイムという概念は曖昧であり、かつそれを社会学に求めることは不可能であり、その危険性を知りつつ、あえてパラダイムという言葉を用いれば、このタイプの問い方はその転換を求めようとするものであるといえよう。

この種の社会学論の問い方は、社会学の危機が叫ばれて久しいにもかかわらず、依然として、そこからの脱出が困難であり、既存の社会学の認識に沈滞しがちな傾向にある状況において、新しい活路を見出すための一つの方法であるかもしれない。しかし、どのようにしてそれが可能なのか、この点をさらに検討したい。

一つの方法は、ソクラテス的な「無知の知 (oida hoti ouk oida)」の立場に立つことである。社会学の認識に関する自己の無知性を自覚することによって社会学論を開始することである。われわれは、既存の種々の社会学知を有しているが、他方では全く無知に等しい。すでに述べたように、問いは全くの無知からは起りえないが、少なくとも無知であることを知っていること、それを自覚することによって所期の目的は達成される。問いとは無知への反省によって、より多く、よりよく知ろうとする作業であるといえるからである。これは、いわば本質的反省的な問い方といえよう。

第二に、この方法は問い自体を問うことから始めなければならない。すなわち第一に、社会学論の問いとは何のために問わなければならないのか、その理由を明らかにしなければならない。第二は、問い方である。その方法は何であることを明らかにしなければならない。第三は、問うてどうするのか、その後の課題に関する認識がなくてはならないという点である。

第一の点について考えると、社会学論で問う理由は、社会学の危機的状况とは何か、社会の昏迷とは何かを理解し、社会学の学問性、科学

性あるいは非科学性を、あるいは科学的解釈と常識的解釈のちがいを、さらにその関連性を明らかにするためであるといえよう。この点は、第三の問うてどうするのかという点と深くかかわっている。社会学論での問いは、社会学が科学であるか否かを一方的にきめるためのものではない。社会学はコントが行なったように自然科学の分類の延長線上に位置づけられてきた。コントは諸科学を論理的、歴史的に順序だてて並べて分類した。この考え方は、社会学を自然科学的に整備し、自然科学をモデルとしてそれに接近し、客観的で実験的方法を用いて一般法則を導き出し、その法則から演繹的に導き出された結果を観察にもとづく経験的事実と照合し、その一般法則を検証するというやり方でおこなわれる。しかし、社会現象はきわめて複雑であって、特定の対象に限定する自然科学的方法のように実験と観察によって一般法則を導き出すことは不可能に近い。また、コントのような19世紀的な自然科学観や科学分類は、今日の科学や技術の現状に適応できなくなり、今日では、はじめに述べたように自然科学自体が問われている。したがって自然科学をモデルとした社会学的方法は批判され、新しい方法を検討しなければならない。社会科学の方法論が多く立場から議論されているのもそのような背景を反映しているからに外ならない。

さて、社会学が科学であれ、また疑似科学であれ、あるいは非科学であれ、そのことを明らかにするだけが社会学論の目的ではない。社会学論の作業を行ない、問い続けるということは、社会学自体の目的性、有用性あるいは無用性を問うことである。今日、社会学は何のためにあるのかといった問いはフォーマルにはきかれなくなった。社会学の研究者は、研究目的を有しているが、それを意識的に明示することを避けてきた傾向がなかったとも言いきれない。ハーバーマスが『認識と関心』のなかで、実証主義と科学主義を批判したのは科学と認識の同一視、理論と実践の分離、実践が技術になってい

る知的状況を告発するためであった。社会学が、マンハイムのいう計画のための「社会的技術 (Soezialtechnik)」となり、その道具と化してしまわないために、社会学論は社会学には科学主義に墮落し、そうした状態におちいる危険があることを指摘し、それを回避する方法を具体的に提示しなければならない。また社会において、現実には起きている社会問題を少しでも解決するための提言をおこなうことが社会学論の問いの目的であるといえる。それは、不合理な社会統制や支配機構、抑圧々等からの人間性の解放のための問いであり、たんなる問いのための問いであってはならない。ハーバーマスは、それを『「解放的な認識関心」に求めている。彼は、「技術的な認識関心」にもとづく「経験的分析的科学」と、「実践的な認識関心」に土台を置く「歴史的解釈的科学」に対し、「実体化された力の従属から主体を解放せんとする」さきの「解放的な認識関心」にもとづく「批判的社会科学」を考えたのである<sup>2)</sup>。

社会学論の問いの必要性は、社会学が社会学研究者の意図とは別に、あるいは社会学者の目的と関係なく、社会学が人間を支配し、管理し、統制する社会的技術と化す危険性を指摘するためにも必要であり、たんに指摘するだけでなく、それを防止する具体的提言や策を考えるために必要であるといえる。かつての社会学は、たとえばコントのようにきわめて抽象的であったとしても「社会を再組織するため (pour réorganiser la société)」のプランとしてある目標を有していた。今日、社会学は抽象的であれ、具体的であれ、どのような目標を有するのか。それは社会の改良や社会問題の解決にすぐ役立つ目標であればそれにこしたことはない。しかし、そのような有用な目標がなくてもよい。荘子の言うように「無用の用」が実は大用をなすことも考えられる。しかし少なくとも社会学が人間の支配と管理の道具に陥らないようにするために、批判的な社会学や自己反省の社会学を展開することが必要であろう。

### 3.

社会学とはどのような学問かという問いは、さきに述べた第二の問題、その問い方の問題、つまり、どのように問うのかといった点と関連する。では、問い方とは一体何であるのか、それは誰が、何を、どのように問うかといった点に分けて考えることができよう。

問いを誰が発するかという第一の点について、当然、社会学論の場合、その担い手は社会学の学徒であり、研究者であり、専門家であるといえよう。たしかに社会学を学んだ人間でないと社会学はわからないといわれる。果してそうなのか、社会学とはそんなに一般大衆とかけ離れた理論なのであろうか。もしそうだとすると、そのこと自体が重要な問題である。社会学を理解する人種が特定の専門的知識を有する人種であること自体が社会学論を更めて問わねばならない理由ではないのか。社会学の研究は、一般大衆のためであり決して特定の知識人のためのものではない。しかし、現実には専門家のための議論になっているのではないのか。専門家のための問いとは学問のための学問を問うのと同じである。だが、学問は現実の問題を解決するためのものであり、決して学問のためのものではない。ここにいわば本末転倒の状態がある。これを正常に戻すことが社会学論の一つのねらいであるといえよう。

このように、専門家の問いは現実から遊離しておこなわれるのではない。常に生活者として問うべきである。研究者が、自己の専門領域に没頭しているとき、その作業は必ずしも全体を見渡しておこなっているとは限らない。自己閉鎖的になりがちであり、自己流で、我田引水的な問い方をしている場合が多い。問う主体が、自らの作業、研究活動自体を俎上にのせるような問いは閉鎖的な研究者からは生まれてこない。研究者間のコミュニケーション、対話、共同研究、討論、批判によって問い方を学ぶ場合が多いのである。また、同じ専門領域外の研究者との対話、研究者や専門家でない一般の人々、大衆とのコミュニケーションによって問い方を

学ぶ場合も多いのである。したがって、誰が問うのかといった問題を考えるとき、自己中心的に問う主体を限定することはできない。多くの問いかける人々の中で専門家は、その一員にすぎないわけである。そして彼が、専門家として問う主体であるためには、たえず他の人の問い方を学ぶことが必要になってくるのである。あとでべるように、問いは独言(monologue)であると共に、対話(dialogue)というスタイルを有しているのである。

問いの第二の問題は、何を問うのかという、問いの対象である。科学が科学として認められる最低の条件は、何を研究するのかといった研究対象が明らかで、それにどのようにアプローチしていくかといった研究対象が明らかで、それにどのようにアプローチしていくかといった方法が明確なことであるといえよう。したがって、問いが科学的になるためには、この条件の一つである対象を明らかにしておかなければならない。それはマクロ的なレベルからミドル・レベル、ミクロ・レベルに大きく分けることができる。また対象を構造として静的にとらえる場合も、過程として動的にとらえることもありうる。これらのレベルやとらえ方も問い方と密接にかかわりあう。問い方の方向性、問い方のタイプによって対象が対象としてあらわれるといってもよい。それは、さきに述べた問う主体の認識によってことなるといえよう。社会学では人間の行為から出発する理論が多いが、それは方法論的には方法論的個人主義の立場から対象をとらえようとするものであり、マクロな全体的なとらえ方は方法論的集合主義的となる。また、社会を一つのシステムとしてとらえる見方は、問い方としてはシステム論的であり、それを人間の多元的で、日常生活世界においてとらえようとする見方は、問い方としては現象学的であり、理解社会学的である。

このように、何を問うのかといった対象の問題は社会学論的に常に相反する問い方が存在すること、しかもそれはいわば楕円の二つの焦点

として、相互に対立し、かつ補完しあう関係にあるといえる。

問いの第三の問題として、どのように問うのかといった問い方自体、その方法にかんする問題がある。方法 (method) とは *meta ta hodos* つまり *nach gehen* (ある道をたどる) である。それは所期の目的に到達するために道を発見することといえよう。社会学論は、社会学自体が科学的であるか否かを問うことであるから、社会学論は当然その道を発見する作業を行わなければならない。まさに社会学論は、社会学的方法論の土台をなすものといえよう。社会学論は、社会学的方法論の一種であるということもできるが、それは社会学的方法論自体を問う作業であって、社会学方法論の基礎論ということもできる。

ところで、このような基礎論的な意味づけの方法を問う作業は、唯一つの方法をもつて、それが正しいという態度を排除しなければならない。社会学的方法はレベルによって異なり多様であり、それらは相互に補完しあって社会学の現実をとらえようとする。そのような多様な方法間の関連性、重層性、多重的な構造を理解することが必要になる。

問い方として考えられるのは第一に問う前提である。あるいは問う側の姿勢といってもよい、問いは解答を期待している。しかし解答が、必ずしも得られない場合もある。それは、問い方がまずかったのか、あるいはそれに対する解答がないのかもしれない。前者の場合、問うて何を求めているのかを明確にしなければならないし、後者の場合、問いとは期待して答えを得られないこと、あるいは、必ずしも解答がないことを予期しておかねばならない。問いを問いだけに終らせないためには、はじめに問う内容を吟味しなければならない。社会学論の問い方も、この二つの例に代表されるであろう。前者の場合、問い方の種類が問題になり、後者の場合、問うことによって予期した解答が何であ

り、現実の返答が何であるかを明らかにし、もしその問いに対立、矛盾、距離があれば、それらが何故生じたのか、それらを解消するために、いかにすべきかを検討しなければならない。

問い方に関連する第二の問題は、問い方のタイプである。それは連続的か不連続的かのタイプに分けることができよう。いわば前者は、面あるいは立体としての問いであり、後者は点としての問いである。前者の場合、問いの構造が当然考えられる。それは問いと問いとの関連性や論理の一貫性の有無といった点と関係し、問いが問いを生むという問いの間の上下関係、従属関係、あるいはそれによって形成される包摂構造、重層構造が問題になる。問うことによって、今迄明らかでなかった問題が生じると共に、新しい問い方が生まれる。そのような問い方は発見的 (heuristic) なタイプといってもよい。これがすでに述べた無知と既知との中間として単純で平面的な関係として存在するのではなく、新しい問い方を考えることによって異なった問題を発見するという問い方であるといえよう。

問い方の第三のタイプとして、独語的 (monologische) か対話的 (dialogische) が考えられる。前者は、自問自答的であり、後者は、会話的である。問う主体は、前者では一人であり、後者では複数人である。しかし対話の場合に必ずしも複数人である必要性はない。例えば、プラトンの「プロタゴラス」篇を読むと、プラトンがソクラテスとなってプロタゴラスに語りかけ、またプラトンがプロタゴラスとなってソクラテスに問うているという形で対話が進められている。

さきに、社会学論は『「社会学の社会学」の社会学』という問いの無限の連続を生む危険性があることを指摘した。それはクルマを運転しながらクルマを後から押す作業にたとえられると述べた。しかしそれは可能である。社会学論はプラトンの対話をなすことによって、社会学自体の社会学を展開することができると考えられる。

#### 4.

以上、問いを問うことの意味と、問い方につ

いて若干考えてきた。ここではさらに問いが何

故生じるのかについてふれてみたい。

例えば、人が道や方向を尋ねるのは、自分が見知らぬ場所にいることに気づき、あるいは行くべき方向を見失ったり、迷っていることに気づいたときである。彼は、自分の行く目的地、そこにたどりつく道や方角を知っていた。しかし、その場所や方角と現在いる場所とのちがいに気づいたから道を尋ねるのである。つまり、問いは一定の明確な目的を有し、その目的と現在の状況との相違点を認識するところに発生する。

このように考えると、社会学論の問いは、社会学とはどのような学問かを明らかにすることであり、現在の状況は、それがまだ不明確であること、社会学はいわばカオスの状況にあり、危機的状態にあることを認識することによって生じる。ここで危機的ということばについて少しコメントをしておかねばならない。それは、A. G. グールドナーが the coming crisis と表現したために、あるいはある種の意味付与を行ったために、危機的という言葉が一人歩きしている感がないでもない。そこで、ここでは必ずしも適切な表現ではないけれども社会学に起った変化を地殻変動という言葉でとらえてみたい。1960年代後半から今日まで、社会学には大きい地殻変動が起こったことは事実である。もう少し長いスパンをとって、過去40年、50年間をふり返えると、わが国の社会学はもちろん、世界の社会学界で、大きい地殻変動が起こったといえるであろう。あるいは、それが現在進行中であることも肌で感じるのである。たしかにそれは、個人的な感触であるかもしれない。しかし、グールドナーのいうように、社会理論の構築作業とまではいかなくても、それに類した研究作業が「個人的経験を通してすでに知られているもの、つまり個人的にリアルなものの意味の探究」であれば、この個人的感触が何であるかを自らみきわめることから作業は出発するといえよう。彼はまた、この作業が「しばしば自分を脅かすものとの闘いの努力である」とも述べている<sup>3)</sup>。この闘いを開始するため、社会学で、かつてどのように地殻変動が起き、今、生起しているかをまず把握しなければならないで

あろう。

社会学の変動の期間をみると、それは社会学の成立以来続いているとみることもできる。社会学史をひもとくまでもなく、学説は、社会の実体的把握と機能的理解の対立、機械論と有機体論、客観主義と構成主義、社会の静的把握と動的把握、マクロ・レベルのとらえ方とミクロ・レベルの分析、方法論的个人主義と方法論的集合主義、理論と調査、科学的合理的の把握に対する非合理的、超合理的、合理的以前の信念などが多様に併存している。

いわば社会学論は、既存の社会学研究の批判をとおして現状認識をおこなう作業であるといえる。それは、学説史的研究をふまえた研究であると共に、それらを乗り越える理論構築の作業であるといえる。この後者の作業は、理論体系自体に批判の目を向けることによってなされるが、具体的には、それは社会学的認識と社会学の科学性自体を問うことによってなされる。つまり社会学論は批判的な学説史研究と科学社会学的認識論とでもいえる二つの問い方によっておこなわれるべきであるといえよう。後者の問題は、社会学と科学との関係としてとらえ直すことができる。

ところで社会学は実証科学として、その科学性を自明のものと考えてきた。その背後にあるのは自然科学のモデルであり、自然科学的な合理性、客観性、普遍性を重視する立場であった。近代科学の世界像を完成したのはニュートンといわれている。ニュートンは、力学の三つの基本法則を初めて定式化し、太陽系惑星の運動が、万有引力の働きによるものであることを証明することに成功した。しかし最近の科学史は、近代科学の創始者であるニュートンが、万有引力を神の働きに帰すなど、今日からみると、必ずしも合理的でなく、科学的でなかったことを明らかにしている。ニュートン以来の古典的、機械論的自然観は相対性理論と量子力学の登場によって、いままでの体系を大きく変えた。また物理学にたいして新しい生物学、分子生物学などの考え方が生まれ、生物学においても今世紀の進化論の主流は、ダーウィンの進化論であったが、それに対して、自然選択をもとにし

て進化をみようとするネオ・ダーヴィニズムが唱えられ、近年、それに対して木村資生の進化の中立説や突然変異を進化の原因と認めない今西進化論などが現われている。

近代の中心的問題は、物理学に代表される自然科学的認識能力をいかに人間・社会の現象の解明に用いるかであった。社会学もこの流れに沿って実証主義という旗印をかかげて、自然科学的なアプローチを重視しようとした、自然科学的方法を模倣すること、それに限りなく近づくことが追求されてきた。しかし社会学の対象は、自然科学のそれとは同じではない。したがって、それに接近する方法も自ずから異なってくる。過去においてもディルタイの生、ベルクソンの直観、後期フッサールの生活世界、ハイデッカーの現存在、後期ウィットゲンシュタインの生活形式など、科学的世界をそれとは異なった世界からとらえようとする試みがなされてきた。

また、科学の発展に関しても、それは必ずしも直線的でなく、既存の知識を土台にして知識を拡大し、累積的に発展するものであるといわれている。文化社会学の A. ウェーバーは、文明過程と文化運動を区別し、前者は直線的累積的な進歩の形式をとって変化するのに対し、後者は、一回的なものであり、人間の精神的創造力の所産であると述べてきた。

このような考え方は、科学の直線的累積的發展観に立脚するものであった。この考え方に対し、T. クーンは、通常科学に対するパラダイムの革新を通して科学が発展するという科学の不連続的發展説を唱えたのである。そしてクーンの場合重要な指摘は科学という活動は、それぞれの時代と社会から離れておこなわれるのではなく、それは社会的な活動であり、社会的・歴史的に形成され、変形されるとみたことである。

また、ハンソンの理論負荷性の指摘も科学的観察は、偏見なく純粋にみることを意味するのではなく、そのなかに既に、解釈的契機が構造的に組み込まれていることを教えている。したがって、経験に照らして反証されなければ科学理論でないというようなポパーの主張は、ハンソ

ンの観察の理論負荷性という考え方によって覆されることになる。

このようにクーン、ハンソンらの新しい科学哲学は、科学とは何かを根本から問い直そうとしている。1960年から70年代にかけて、西ドイツの哲学界ではいわゆる知の一般理論、科学論がさかんに論じられるようになったのはそのあらわれである。

科学論の問題意識は、われわれの生活のあらゆる領域が科学の発達によって影響をうけ、そのインパクトが強い現実生活の中で、科学とは一体何であるかという疑問や、科学はもともと生活世界に起源をもつにもかかわらず、生活世界とかかわりのない自ら完結したものであるとする論理実証主義への批判として生じたと考えられる。ポパーらの批判的合理主義は論理実証主義のいう科学的命題は仮説であり、この仮説としての理論を反証 (Falsifikation) に付すことによって否定し、仮説提示と反証の繰り返しの中で、漸次的に真理に到達できると説明する。しかしこの立場も批判理論 (die kritische Theorie) によって批判される。それは、批判的合理主義が科学と生との関係を十分に反省せず、近体社会を支配する技術的合理性というイデオロギーによる科学の支配を容認しているという批判である。しかしさらに、この批判主義もローレンツェン、ミッテルシュトラース、カムバルテルらの構成主義、アーベルの超越論的遂行論、シュミッツやヴァルデンフエルトらの新しい現象学、ウィーラント、ペグラー、リーデルなどの解釈学的哲学によって論争の場に引き出されることになる。しかし、70年代に入ると、さまざまな立場の研究者が、一つのテーマをめぐって論じることにより、共通の理解を得ようとする対話の時代に入ったといわれている。このような一連の研究活動は、近代科学の基礎づけを生活世界に起源を有しながら、それが看過されてきたことへの批判としておこなうところに見出すことができる<sup>4)</sup>。

このような新しい科学哲学の流れは、フッサールの生活世界論にもとづく現象学的な社会学、ハーバーマスの超越論的立場からする解釈学的科学観などと軌を一にして、社会科学の



科学性自体を問う大きい流れとしてあらわれている。社会科学のなかで、数学的な方法を取り入れた科学としての優等生である経済学は、1960年代末から70年代初頭に内在的批判にさらされるに至った。それは高度成長がもたらした豊かさの背後に生じた公害問題、環境破壊をはじめ、都市化、所得分配の不公平などの社会問題に対して、既存の経済学理論が対応できなかったためである。この点に対する佐和隆光の指摘によると、その批判は、既成派経済学が依拠する「諸前提の非現実性と、イデオロギー性を告発する」という側面と要素論的かつ数量的な方法の限界を指摘するという二つの側面を有しているといわれている<sup>5)</sup>。そして経済学の有用性、有効性を決めるものは時代と社会の文脈であるということになる。

社会学の場合も、多くのパースペクティブが重なり合っているといえる。それを構造主義、シンボリック相互作用説および、エスノメソドロロジーの三つに分ける見方もある。それによると、コントにはじまり、デュルケム、パーソンズに至る流れは、合意と秩序の問題に注目するパースペクティブであり、これとマルクスの闘争のパースペクティブの二つを合わせて構造主義とよび、シンボリック相互作用説に属する人として、G. H. ミード、H. ブルーマー、E. ヒューズ、A. シュトラウス、E. ゴーフマンらを受け、エスノメソドロロジーに属する人々として、A. シュッツ、H. ガーフィンケル、A. チューレル、H. サックスらがあげられている<sup>6)</sup>。

また、ゲールドナーは、講壇社会学とマルクス主義を受け、前者は福祉国家の市場調査あるいは自由主義的テクノロジーとなり、現状維持、粉飾機能を担っており、後者のマルクス主義も前者と同様、保守的、抑圧的である。しかしゲールドナーは、両者に内在するラディカルな潜在力と創造的な力に注目し、それを活性化する試みとして既存の社会学を超越するため「社会学の社会学」の一つとして自己反省の社会学(Reflexive Sociology)を提唱したのである。そ

れは社会学者自身を変容させ、世界における自己の実践のあり方を変容させる社会学であり、本質的にラディカルであり、人間の自己解放と自己実現をめざす実践である。

このようなパースペクティブは、各々独自の視角、視点に立ち、方法論を用いて対象に接近しようとしている。それらは相互に対立し、批判することによって現実の社会を把握しようとしている。われわれは、それらの学説のそれぞれのパースペクティブを批判的に学ぶと共に、それから自己の社会学論を展開していかなければならない。そのための一つの方法として、さきに指摘したプラトンの対話という問い方であると考えたい。この小論の目的は、この対話を始める基礎的な問題にふれるにとどまり、具体的にその方法を提示する段階には至っていないが、科学社会的に社会学論を展開しようとするのが、プラトンの対話の一つの試みであると考えている。社会学の科学性を問うとき、多くの視角方法がある、その科学性の相対性を認めたくて、社会学論を展開するという作業がこれである。つまり、分析的方法と解釈学的方法、要素還元主義と全体論的パースペクティブ、科学知と日常知、方法論的個人主義と方法論的集合主義、システム論的アプローチと生活世界等々に注目するアプローチなど、それぞれアプローチと方法を容認したうえで、社会学とはどのような学問であるかを問うための対話がプラトンの対話であると考えるのである。しかもそれは、学問のための議論や閉塞的な専門家の間での議論ではなく、一般大衆との対話を通じておこなわなければならない。

この社会学論をはじめようとした一つの動機も、社会学はどのような学問なのか、それが現実の社会にどのように役立つのか、あなたの社会生活、社会関係にどのような意味があるのかと真剣に質問した人に出会ったからである。

なおこの小論は、仏教大学社会学研究所の共同研究(昭和62・63年度)の所産であることを附記しておく、1989年1月7日。(倉橋)

注

- 1) Popper K., The Poverty of Historicism pp. 64-65 Haper Torchbook, 1961.
- 2) Habermas J., Erkenntniss und Interesse S. 260, 1965.
- 3) Gouldner A. W., The Coming Crisis of Western Sociology, 1970 Basic Books p. 484.  
栗原彬, 瀬田明子, 杉山光信, 山口節郎訳『社会学の再生を求めて3』新曜社, 昭和50年, 201頁。
- 4) これらの点にかんして拙稿「科学社会学の最近の動向」『理想』1985年9月号(No. 628)を参照。
- 5) 佐和隆光「経済学への影響」(中山 茂編著『パラダイム再考』所収, 第5章, ミネルヴァ書房, 1984年) 92頁。
- 6) Cuff E. C. and G. C. F. Payne, editors, Perspectives in Sociology, George Allen & Unwin blinwin 1979, pp. 11-12.

参 考 文 献

- B. Barnes, T. S. Kuhn and Social Science, Macmillan Press 1982.
- H. I. ブラウン, 野家啓一, 伊藤春樹訳『科学論序

説』培風館, 昭和60年。

- K. R. Popper, the Poverty of Historism, Harper Torchttok 1961.
- 丸山高司『人間科学の方法論争』勁草書房, 1985年。
- 佐和隆光『経済学とは何だろう』岩波書店。
- 佐和隆光『パラダイムシフト技術と経済』筑摩書房, 1988年。
- 数理社会学会『理論と方法』創刊号, 1986年。
- 現代社会学会議編集『現代社会』特集 社会学の社会学, 1979年。
- 『思想』特集 知の一般理論, 1980. 1.
- 『思想』特集 科学論, 1983. 10.
- F. フェラロッテ, 古城和明, R. ロッヂ, 三島邦夫訳『オールタナティヴ社会学』合同出版, 1985年。
- O. ペゲラー編『解釈学の根本問題』晃洋書房, 1984年。
- D. Held, Introduction to Critical Theory, University of California Press, 1980.
- R. Keat and J. Urry, Social Theory as Science, Routlege & Kegn Paul, 1982.
- S. S. Blume, Perspectives in the Sociology of Science